Meisei University

中村光夫のボヴァリスム

——その小林秀雄論を中心にして——

和田正美*

一　ことばについて

この論文に取掛らうとしながら、ふと、地下の中村光夫が拙稿の表題を知つたら何と言ふだらうと思つた。彼は私に、その論文は文學の専門家だけに讀ませるつもりかと問ふかも知れない。私がそれに答へて、必ずしもさうではないと言ふと、中村は、それならボヴァリスムといふ特殊な用語を使ふのは止めた方がいいと忠告するやうな氣がする。私は問ひ返す。あなただつて「日記文學について」の中でこの言葉を使つたぢやないですか、[1]あれは一般讀者のために書いた論文ではなかつたのですか、と。中村は少し考へてから、しかしあの場合のボヴァリスムは表題ではなく本文の中にあしらつてあるので前後の文章を丁寧に讀みさへすれば誰にでも大體の意味の見當がつけられる筈だと答へる。

解りました。私もこの言葉の意味がどんな讀者にもつかめるやうにしませう。それも私の場合にはこれを表題の一部にした關係上、文脈からの類推といふことではなく、ボヴァリスムの何たるかをきちんと説明してから本論に入ることにします。

中村は頷くがその後かう付加へることが想像される。ついでにもう一つ言はせてもらふと研究紀要だからといつてことさらむづかしく書いてはいけないよ、文學の世界に學術論文といふものはあつてないやうなものなんだからね、と。

以上、中村光夫との間に架空の對話を試みたが、特定の作家を對象にした文學の研究は、論者の主體を只管滅却した實證的な研究はいざ知らず（さういふ研究の成果が「學術論文」と言へるかどうかはともかく）多少なりとも批評的要素を含む場合には、その作家との對話がそこに見え隠れしてゐるのではないだらうか。中村自身、數多の作家論を手がけながら、何等かの程度において、そのやうな對話を樂しんだのであつたらうと思はれる。

勿論、中村に何の根據もないことを喋らせたわけではない。彼の有名な、です調、ます調の美文は、少なくとも第一義的には、話を解りやすくしたいといふ配慮から生み出されたに違ひないのである。

早くも昭和十年代の『戰爭まで』の中で使用されたこの文體が中村の文藝評論に定着したのは昭和二十五年の『風俗小説論』においてであつたらうが、彼はこの評論を發表した直後に、その文章のスタイルについて、三好達治から、「あれは、どういふお考なんですか」と訊かれて、「どういふッて、一ト口にいつて、評論をやさしくしようといふ考へですね」と答へてゐる。以下、この問答は、「やさしくなりますかねえ」、「やさしくなるんぢやないかと思ふのですが」[2]と續い

NII-Electronic Library Service

Meisei University

てゐる。

中村のかういふ態度については河上徹太郎に次のやうな證言がある。

ある座談會で、顔觸れが私にとつてごく内輪で話が通じるものだから、つい氣を許して仲間うちのスラングでしやべり出した。すると中村君は、こゝは座談會ですよ、も少し説明的に發言しなけりや讀者に通じない、と私をたしなめた。何でもないことのやうだが、この配慮はいつも彼が獨りでものを書く時自戒として座右から離さない態度である。[3]

文藝評論といへどもその文章は讀者に廣く開かれてゐなければならない、彼等の理解を拒むやうなものであつてはいけないといふのが中村の基本的な心構へであつた。彼がそれに何處まで成功したかといふ問題は殘るとしても、である。

さて、問題のボヴァリスムであるが、フランス語の bovarysme は今日では佛佛辭典はもとより、大型の佛和辭典にも載つてゐる單語である。左にその實例を三つほど示すことにしたい。

Le Petit Larousse——(du n. de l'héroïne du roman de Flaubert, *Madame Bovary*). Comportement qui consiste à fuir dans le rêve l'insatisfaction éprouvée dans la vie. (〔フローベールの小説『ボヴァリー夫人』の女主人公の名から〕現實生活の中で味はせられる不滿から逃れて夢に遊ばうとするところに存する行動)

大修館書店・新スタンダード佛和辭典——感情的・社會的欲求不滿を解消するため自分を小説的に空想する傾向。

白水社・佛和大辭典——〔Barbey d'Aurevilly の造語（一八六五）で後に哲學者 Jules de Gaultier が論文の主題としたもの（一八九二）〕（ボヴァリー夫人のやうに）自分を現實の自分以上のものと錯覺する一種の誇大妄想。

以上の通りであるが、私はこれらの説明にいささか不滿である。ボヴァリスムといふ言葉はどんな場合にもかういふ當初の、輕蔑的（ペジョラティフ）な意味でしか使へないであらうか。

ここで中村光夫の使用例を見ることにしよう。彼はすでに名を擧げた「日記文學について」の中で、ゴンクールの日記の内に描かれたフローベールの姿に着目し、ゴンクールの「フロオベル凡人説、あるひは俗物（ブルヂヨア）説」に共感する立場から、次のやうに述べてゐる。[4]

「ボヴァリイ夫人」の著者がフランスの田舍風俗をあれほど生き生き描き得たのは、そのなかの俗物どもと彼自身が共通のものを多く持つて居り、彼等の「思想、趣味、習慣、偏見」などがフロオベルのうちにあつたからだと云つても、今では誰も驚かないでせう。

或る人が指摘したやうに、ボヴァリイ夫人を動かした最大の情熱が、自分が實際さうでない者になりたい願望であるとすれば、俗物（ブルヂヨア）にたいする嫌惡ほど俗物（ブルヂヨア）的なものはないことはフロオベルも知つてゐた筈です。

おそらくゴンクールの癇に一番さはつたのは、俗物にたいする憎惡がそれへの愛着と紙一重のものであることに氣付かず、この

NII-Electronic Library Service

Meisei University

素朴な情熱に身を委すことができたフロオベルの「ボヴァリズム」であつたのです。（傍點、引用者）

幾分曖昧な文であるが、それはともかく、文中の「自分が實際さうでない者になりたい願望」といふ箇所には注意を引き寄せられる。これこそボヴァリスムの（誤解されやすい表現であるが）文學的な定義ではないのか。

中村光夫がここで問題にしてゐるのはボヴァリー夫人とその作者フローベールの精神的傾向であり、それをすんなりとは承認しない地點から論が發せられてゐることは事實である。もしこの「自分が實際さうでない者になりたい願望」を「身のほど知らずの高望み」といふ卑俗な意味にとらなければならないのなら、それは辭書の記述を補強することになるが、この表現はそれに接する人々に揶揄嘲笑の契機しかもたらさない代物であらうか。さうとは言へないであらう。

中村が「日記文學について」を發表したのは昭和四十四年であり、彼がフローベールを愛讀した時期から三十何年かたつてゐる。青年時代にはフローベールをほとんど偶像視してゐた中村が、當時はむしろ輕蔑してゐたといふゴンクールに今や「纖細なパリッ子」を見て、彼と共に、フローベールの俗物（ブルヂヨア）性を指摘するに至つたことは興味津々たる事實であり、これは拙稿の趣旨に無關係ではないのであるが、この問題を今これ以上論じることは殘念ながら出來ない。

いふまでもなく言葉は歴史的、社會的なものである。それぞれの言葉の意味は無數の人々の使用によつて自ら限定され、私達がそれを恣意的に解釋することは許されない。私達の個を超えた生命を湛へてゐる言葉に對して私達に出來ることは、意識的な努力により、それに向つて成熟することだけであらう。言葉が人間の上にあるのであつて、その逆ではない。（そのことを忘れて言葉いぢめに狂奔し、たとへば日本語の缺陥と日本人の精神生活の缺陥の間を行きつ戻りつするやうな論者は呪はれよ！）しかし私はそれを百も承知の上で、當面の問題に關して次のやうに考へて見ようと思ふ。

ボヴァリスムのやうな言葉は日本語のみならず、おそらく本家本元のフランス語の世界でも、未だ十全な市民權を獲得してはゐないであらう。この言葉には變化の餘地が充分にある。辭書が傳へるこれの原義と文學者がこれに持たせる含みの間に微妙な差違が感知されることについてはすでに述べた。そしてボヴァリスムが形成の途上にある言葉であれば、私達は、丁度親が子供の進路に干渉するやうに、この言葉の用法に自らの意思を反映させてもよいのではないだらうか。

その成否はさておき、この論文では、ボヴァリスムといふ言葉に或る振幅を與へようとすることが私のささやかなもくろみである。その振幅の一方の極には、ボヴァリスムに取憑かれた人（すなはちボヴァリスト）を貶める意味合ひを据ゑざるを得ないが、他方の極には、彼への賞讃が現れるであらう。

中村光夫のボヴァリスムにおける他方の極とは何か。それは自らの、或は自他の現狀に焦立つところから、それを超えた何物かを求めたがる性癖である。もつと正確に言へば、その性癖を文學的表現の域にまで高めようとする、たゆみない努力の謂である。

二　青春の重視

中村光夫の用語の中で特に目立つのは青春と文明批評である。この

NII-Electronic Library Service

Meisei University

内、青春は屢々、論の對象にされるが、文明批評はどういふわけか、それに言及されることが少ない。しかし私見によればこの二つは同じ根から分れたものであり、中村を論じるためには、彼の文明批評家としての側面を見落してはならないのである。

中村における青春と文明批評に共通する要素をあらはすに、「自分が實際さうでない者になりたい願望」といふ表現を以てすることは適當ではない。私達はこれを修正して、「自分が（或はもつと廣く當事者が）現に所有してゐないものへの希求」とでも言はなければならない。實際、中村は文學者にとつての青春の意味を説く場合にも、また、文明批評の名において現代日本の文化を批判する場合にも、仰ぎ見るべき何かを持つ人間として、それを忘れたくても忘れられない人間として振舞つた。彼の作家論は時々、對象の多様性を無視して論者の側の一方的な基準を押しつけたものとして非難されるが、彼のそのやうな態度も、かかる精神のやや性急なあらはれであつたらうと思はれる。

以上、「自分が實際さうでない者になりたい願望」を「自分が現に所有してゐないものへの希求」に置換へて見たが、この二つの間にどれほどの違ひがあるといふのか。ボヴァリスムといふ言葉をその生みの親たるボヴァリー夫人に密着させることを止めて、一人歩きさせようとする意圖から言へば、ここには中村光夫のボヴァリスムがほとんど輝き出てゐると言つてよい。

中村を論じるのなら彼の文明批評を取上げる必要がある、それをしないと片手落ちになるといふ意味のことを書いたが、私自身、この小論の中で特に述べようとしてゐるのは青春の方であり、文明批評には觸れることが出來ない。中村の文明批評についてはいづれ稿を改めて、といふのがかういふ場合の常套句なのかも知れないが、その機會がめぐつて來るかどうか解らないのに、さう言つてしまふことは好ましくないと思ふ。私にはそれを檢討する意欲があるとだけ、ここでは記しておかう。拙稿の讀者の中から、私の言説に誘はれて、中村の文明批評に興味を覺え、それに取組んで、一つの論を展開する人が現れたとしても一向差支へないのである。

中村光夫の全著作の中から青春の語を拾ひ出せば夥しい數に上るであらう。彼はそれほどこの言葉を愛し、それに執した。

中村の二十代の作品である『戰爭まで』は彼のフランス留學のまことにユニークな報告書であるが、早くもその中で、後年の彼が愛用するに至る青春の語が堂々と使はれてゐることは興味深い。中村は數百年前の「イタリーのルネッサンスには近代ヨーロッパの本當の青春がある」といふ視點から、たとへば、次のやうに書いてゐる。[5]

> 實際、イタリーのルネッサンスは、地球上のどの民族にも、何百年に一度しか廻つて來ない青春の時代ではないでせうか。
> 青春に生きるといふことが、現代のやうに個人的な冒險でなく、國家そのものが健康な若さに醉つて、未知の世界へ敢へて足を踏み入れることを恐れなかつた時代といふ氣がします。

中村はこの後、「ルネッサンス時代の最盛期に、フロレンスの政權を握つてゐたローラン・ド・メディシス」の、「美しき青春は束の間に過ぎ行く　樂あれば須らく樂しめ　誰か明日の日を知らん」といふ「唄」を紹介するのである。右の引用文の中の、「青春に生きること

NII-Electronic Library Service

Meisei University

は現代では個人的な冒險である」といふ指摘は中村の後年の青春論から見るといささか妙であるが、それは（この文脈ではさう書かざるを得なかつたかも知れないので）重要なことではない。重要なのはルネッサンスといふ歴史上の一時期が青春の名において理想化され、二十世紀の現實がその理想の光に照されてゐることである。

ルネッサンスの美と輝きを發見して、それに陶醉した若い日本人の新鮮な驚きと喜びを傳へる文を前にしながら、ボヴァリスムといふが如き、否定的ニュアンスを消去することの出來ない言葉に思ひを致すのは私としても後めたいが、もしこのやうに、過ぎ去つた青春を規範にして現實に臨む態度が、精神のパターンに化したとしたら、それはボヴァリスムを以て遇してもよいのではないか。そしてその傾向は『戰爭まで』よりほぼ十年後の『風俗小説論』の中に感じられるのである。

日本の近代小説のリアリズムの技法の分析と批判を主眼にした『風俗小説論』のほとんど冒頭に近い箇所で私達は次のやうな一節に出會ふ。[6]

> おそらくひとりの人間の生涯にも、彼が後に實現し得たより、はるかに多くの可能性を孕んで生きる青春の一時期があるやうに、時代精神の巨大な流れのなかにも、やがて歴史の必然によつて刈りとられる幾多の不運な芽が並んで萌え育つ青春期が何十年に一度かづつはめぐつてくるのです。我國の明治文學で、もつともその名に價する時期は、漱石が「猫」を發表した明治三十八年から、花袋の「蒲團」までの二年あまりであつたと思はれます。
>
> 青春がおのおのの個人にとつて、悔恨と哀惜の對象になるのは、そこで實現の機を見出せなかつた幾多の生への可能性によるのであるとすれば、僕等はすでに人間の生涯に近い時間を經過した我國の近代文學史の或るモメントに對して、眞劍な悔恨の情を抱くべきではないでせうか。

文藝評論や文學史の記述には本來なじみさうもない青春の語がこのやうに、一國の小説の歴史と運命を辿る文の中に位置づけられたことは、それ自體としては壯觀と言つてよい。これを書いた中村の心情に卽して考へれば、おそらくここには、とかく人間の生（なま）の感情や生活から離れて單なる學識の集積とその誇示に走りがちな文學論を再び人間化したいといふ欲求が働いてゐるのであらう。しかし一面から言へば、評論への「青春」の侵入を許容することは、そこに一つの職業的習性が出來上る危險に曝されることでもある。『戰爭まで』においては感動の率直な表現であつたものが『風俗小説論』では微妙に變質し始めてゐるといふ印象を拭ふことが出來ない。

事實、この頃を境目にして、中村はその青春理論を個別的な作家論に適用するやうになつた。なるほどそのはしりともいふべき「漱石の青春」は『風俗小説論』以前の昭和二十年の作品であるが、他はおほむねそれ以後である。中村の本格的な作家論は多分そのどれにも青春といふ言葉が含まれてゐるだらうと思はれる。意地惡な言ひ方をすると中村は自らが手掛ける作家達をそれぞれの、今や後にした苦の青春の嚴重な監視の下に置いた。もつとおだやかな言ひ方をすると彼は論の對象として選んだ作家達を、實現し得たかも知れない可能性と共にあつた青春にもう一度向ひ合せたのである。丁度、彼自身、或はイタリーのフィレンツェに始まつたルネッサンスを、或は明治文學におけ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

る「猫」から「蒲團」までの二年間を、それが内包してゐた豊かな可能性の故を以て愛慕したやうに。

それら青春を核とした作家論の中で最も有名なのは昭和二十六年の「荷風の青春」であらうが、むしろそれよりは、中村の一種獨特の小林秀雄論にささやかな考察を加へることにしたい。そこには青春論といふボヴァリスムの長所も短所も、肯定面も否定面も存分に現れてゐるやうな氣がする。

三　小林秀雄に見た青春

中村光夫は書評風の文まで含めると小林秀雄論を隨分書いてゐるが、ここで取上げるのは、昭和三十一年に筑摩書房から出版された現代日本文學全集42の『小林秀雄集』の「解説」であり、中村光夫全集には「小林秀雄小論II」として収録されてゐる所のものである。[7] 左に掲げるのはその最終章「青春」[8]の全文である。

> 氏（引用者註。小林秀雄氏のこと）と志賀直哉との第二の共通點は、青春が兩者の生活と文學に果した役割の重要さです。もつともこの共通點は同時に相違點でもあり、文學者のあひだに見られる影響が、本質的なものであるほど、兩者をどんな違つた存在に育てるかについての見事な例證と思はれます。
>
> 氏と志賀直哉、その直哉に短篇の技術と文體の上で大きな影響を與へた國木田獨歩を並べて、僕等は明治以來の詩的モラリストあるひは人性を唱つた詩人の系譜を考へることができます。
>
> 彼等はいづれも熱烈な藝術の使徒でありながら、いはゆる藝術至上主義者でなく、廣い意味での人生の教師たることを理想とした點でも、またその詩的素質を表現するに散文を決定的な手段とした點でも共通點をもつてゐます。
>
> しかしそのもつとも興味ある類似と對比とは、彼等がいづれも短命を本質とした青春作家である點です。
>
> 作家の長命あるひは短命と彼の制作との關係は、おそらく文學のもつとも神祕な部分でせう。
>
> 長生きをしなければできない仕事が一方であると同時に、短命な人だけが捕へ得る眞實をもられた作品が、苦がい寶として我々の間につたへられるのも事實です。
>
> 文學は天才の事業であり、そこで結局ものを云ふのは生れつきである以上、作家の仕事が彼の生きた時間の函數でないことは明かです。
>
> 作家の名に値する作家にあつて短命とはたんに長命な人間の何分の一の時間を生きることでなく、何倍かの速度で生きることなのです。青春の表現を全人生とひきかへに生きること、ここに作家の短命の本質があるといへませう。
>
> 小林氏の評論の對象が、短命な藝術家へ[ママ]偏愛と熱烈な共感を特色としてゐることは、龜井勝一郎氏も指摘してゐましたが、ランボオ、モツァルト、實朝、ゴッホなど、氏のすぐれた評論の對象になつたものに、健全で長命な藝術家がひとりもゐないことは、注目すべき特色です。「短命を賭けねば得られない様な青春の姿」は氏に人生の唯一の美と映つてゐるのですが、おそらく氏自身もほとんどそれを生きたのです。
>
> 氏の青年期の友人が、富永太郎、中原中也など、たんに短命であつただけでなく、短命でなければならなかつたやうな印象をあ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

たへる詩人たちであつたのもこれを傍證するものでせう。

氏はこの青春についてはほとんど何も書きのこさず、わづかに「Xへの手紙」などで抽象的にほのめかしてゐるだけです。氏の「ランボオ論」「中原中也」などの、背後にどんな現實の生活と想念があつたか、僕等は傳説以外の形では知り得ないし、今後もおそらく同じことであらうと思はれます。

このことはおそらく、氏がその表現に文字通り「短命を賭け」なければならぬことを本能的に感じてゐたためで、氏の評論はその青春を逃れるために、或ひはその終つたところから書き始められたのです。

獨歩にとつては青春の危機は人生の自覺と同義語であり、文學に肉體的な短命をかけた彼の青春には、人生と社會の現實に對する本質的な背離はなかつたのです。

これに對して志賀直哉の青春は、人生への反抗を通じて彼のうちに無類の藝術家を育てた代償にその終焉とともに彼のなかの藝術家を殺し、この長壽な作家に異様な制作力の短命といふ不幸を負はしてゐます。

青春がたんに人生の序幕でなく、人生と相容れぬ別の人生であるやうな資性は、小林氏の場合他の二人と比較にならぬ強さに達してゐたのですが、まさにそのために、氏の青春は表現に絶した場所で生きられてしまひ、氏の評論は、氏と人生との間の破れた平衡を恢復しようとする念願のもとに書かれてゐます。昭和初期の文學が社會化することによつて俗化した、あるひは社會化するために俗化しなければならなかつた運命を、氏は氏なりの個性を通じて、誠實に辿つたのです。

氏と人生との平衡は今日では見事に恢復されたやうに見えます。しかし生きるといふ退屈な義務については、もはや見透しのつくところまで歩んできた氏の心が、「人生の戸口に立つてゐることについて」思ひ知らねばならなかつた當時と、それほど異つたものでないことは、氏が最近心血を注いでゐる「近代繪畫論」から察せられます。

「あの頃、僕には既に何も彼も解つてはゐなかつたのか。若しさうでなければ、今でもまだ何一つ知らずにゐるといふ事になる。」と氏がモツァルトについて云ふとき、この言葉は氏の半生における青春の位置を象徴するやうに僕には思はれます。

ここで言葉は見事に決つてゐる。いや、決り過ぎてゐる。そしてどんな場合にも、「過ぎたるは及ばざるが如し」なのである。右に記した中村光夫の一見隙のない小林秀雄論は、その完成の故にかへつて、その眞實性に何がしかの疑問を抱かせずにはおかない。

中村は太宰治の「人間失格」を評して、「このユニックな告白小説に漂ふ不思議な鬼氣は、異様な一人物の内面生活が、馴れて飽き飽きした素材を扱ふやうな平靜な手法で語られる點からきてゐます」[9]（傍點、引用者）と述べてゐるが、この文中の表現を借りれば、中村にとつて小林の青春は「馴れて飽き飽きした素材」を扱ふやうなものだつたとまでは言へないであらう。しかし幾分それに近いものだつたやうにも思はれる。昭和三十一年頃の中村光夫は作家の青春を論じることに長けてゐた。彼の青春的小林秀雄論の中には、繰返すことによつて熟達した職業的技法の現れが感じられるのだ。

中村がここに描いた小林の姿が虚像だつたと言ひたいのではない。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

文學者になる前の小林に、青春としか名付けようがないかも知れない、一種名狀し難い時期があつたことも、その頃の「生活と想念」が文學者になつてからの彼を多かれ少なかれ追ひかけ廻したこともおそらく事實であらう。しかしそれが小林のすべてだつたのであらうか。このままでは小林はその青春の機能に縛られ過ぎてゐる。彼はその青春の中に閉ぢ籠められてゐるやうに見える。

小林が「その表現に文字通り『短命を賭け』なければならぬことを本能的に感じてゐた」のなら、何故、彼はやはり文字通りの意味での短命の作家にならなかつたのか。それが出來ないのであれば、何故、「その青春を逃れるために、或ひはその終つたところから」評論を書き始めたりするのではなく、文學者になることを斷念しなかつたのか。

中村はこの文を作品集の解説として書いたのであり、解説は素人の讀者へのサーヴィスだから本當の批評とは違ふのだといふ反論も豫想されるが、それは當らないと思ふ。この「解説」の引用文に先立つ部分は明らかに讀者の或る程度の文學的素養を前提にしてゐるし、また、中村は昭和三十三年の「小林秀雄論」の中でもこの「青春」の章と同じ趣旨のことをもう少し控へ目にではあるが述べてゐるからである。

引用文の中には中村の本音、それも職業化された本音があると考へてよいであらう。いづれにしても私はここに、作家の青春を過大視するところに生じたこはばりを感じる。中村のボヴァリスムの一つのあらはれを見てゐる。

小林秀雄には「短命な藝術家への偏愛と熱烈な共感」があるといふ中村光夫の指摘はその限りにおいては正しい。しかし中村がそれに續けて、「ランボオ、モツァルト、實朝、ゴッホなど、氏のすぐれた評論の對象になつたものに、健全で長命な藝術家がひとりもゐないことは、注目すべき特色です」と言ふ時、ここに名を擧げられた藝術家の中にドストエフスキーが含まれてゐないことを見落してはならないであらう。いふまでもなくそれはドストエフスキーが短命ではなく、その反對に長命な藝術家だつたからである。

小林がドストエフスキーの研究に打ち込んだことは「自然詩人」の章で説かれてゐるが、引用した「青春」の章では、小林を短命な藝術家のグループに入れた關係上、ドストエフスキーは排除されざるを得なかつた。しかし小林のドストエフスキーへの傾倒の激しさはランボオ、モオツァルト、實朝、ゴッホへのそれを上回つてゐるのである。

小林を強くとらへた長命な藝術家としてはそれ以外にも彼がその「モオツァルト」の中で言及してゐるゲエテ、トルストイの名を擧げることが出來よう。また（これは中村がこの文を發表した昭和三十一年以後のことであるが）小林は等しく長命な正宗白鳥と本居宣長にも並々ならぬ關心を寄せた。

もつとも小林と中村のためにひとこと言つておいた方がよいと思ふのは、右に記した長命な藝術家達（宣長は藝術家といふよりは學者であつたが）の中に、長生きをして功成り名を遂げたといふ趣を感じさせる人はゐないことである。彼等は終生、みずみずしい若さに惠まれてゐた。或はそれに呪はれてゐた。その點、彼等はたしかにランボオ以下の短命な藝術家達に通じ合ふところを持つてゐる。それは認めなければならないが、小林の青春を重視するの餘り、彼と短命な藝術家の結びつきを強調し過ぎることは早計と言はなければならない。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

「青春がたんに人生の序幕でなく、人生と相容れぬ別の人生であるやうな資性」といふ言葉はまことに美しいが、小林の中にはそれに相反する資性もあつたのではないか。そしてそれが彼を生き延びさせたのではなかつただらうか。彼は富永太郎や中原中也とは違つて、「たんに短命であつただけでなく、短命でなければならなかつたやうな」青春を遂に生き切れなかつたやうに見える。その代り、それ以後の小林はその青春から、中村が考へてゐたよりもずつと自由であつたらう。この混沌としてゐた一時期の思ひ出が時として小林の中で蘇り、彼に、今の自分は「『人生の戸口に立つてゐることについて』思ひ知らねばならなかつた當時と、それほど異つたものでないこと」を痛感させた、としてもである。

中村光夫の小林秀雄評の中で一番問題なのは、彼の文が讀者に、小林の青春は何か途方もなくすばらしいものであり、小林はそれを懸替へのない財産として慈み續けたといふ印象を與へかねないことであると思ふ。小林にして見ればそれは正しくないことであつたらう。彼は自らの過ぎた青春を或る時には自分の方へ引寄せ、或る時にはそれを愚行としてしりぞけた、字義上の矛盾さへ犯してさうした、といふのが私の考である。それは小林がこのことで誠實さを缺いてゐたのではなく、青春の方が彼の中で一定の形を取らうとしなかつたからだと思はれる。

たとへば小林は昭和二十三年發表の「ランボオⅢ」の中で、學生時代にランボオの飜譯を手がけた「向う見ず」を想起して、「想へば青春といふものは、向う見ずとともに實に澤山な寶を抱いて逃げ去るものである」[10]と述べたが、同じランボオ論で、死の床にある富永太郎を訪れた時のことを次のやうに書いてゐる。[11]

（僕は富永に）何や彼や目下の苦衷めいた事を喋つた様だが、記憶しない。僕の方が間違つてゐた事だけは確かである。何ものも、自分さへ信用出來ない有様だつた當時の僕の言葉に、何の意味があつただらうか。

この文の悲痛な自己否定の調子は、ランボオと共に過した「青春」は「澤山な寶を抱いて逃げ去」つたといふ回想に見られる愛惜の調子には重なり合ふべくもない。紙數の關係からこれ以上の引用は差控へるが、この種の實例は小林の文章に幾つか見つけられるのである。

ランボオもモオツァルトも「向うからやつて來て」小林を驚づかみにしたのだから、彼がこれらの天才の（中村が小林から借りた表現を更に借りれば、精靈の）壓倒的な影響の下に置かれて自分を見失つたことは彼の責任ではない、と一應のところ言へる。しかし小林がその結果として生じた生（せい）の状態に強ひられて自分が信じられなくなつたり、何等かの惡徳に手を染めたりしたとしても、その責任をランボオやモオツァルトに取らせるわけには行くまい。そのすべては自分の責任である。私達は小林の青春を檢證する時、このやうな、思想、觀念、美と人間の關係といふ微妙な問題に逢着せざるを得ない。小林がその青春をなつかしんだり、その逆に拒んだりしたことを矛盾として一蹴するわけには行かないのである。しかし小林の青春を中村のやうに論じてしまふと、少なくとも鈍感な讀者はさういふ問題が存在することにさへ氣付かないであらう。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

四　中村光夫の青春

中村光夫は作家の青春を繰返し論じることから身につけた巧みな技法を驅使して小林秀雄の青春を文學的に料理した、しかし彼は心にもない嘘を吐いたわけではなくそこで説かれたことは彼の本音だつた、といふのが以上に述べた私の考の骨子であるが、小林の青春に對する中村の熱つぽい讃美は何かそれだけでは片付かないやうな氣もする。小林の青春をこのやうなものとしてとらへた中村の心理の奥底には未だ何かあるのではないか。私にはそれは中村の、彼自身の青春への態度であつたやうに思はれる。

すでに述べた通り、前掲の引用文は昭和三十一年の『小林秀雄集』の「解説」の最終章であるが、この「解説」の冒頭の部分は、

> 小林氏の三十年にわたる著作を、かうして一巻にまとめて讀むと、氏の半生のさまざまな姿が、思ひだされます。
>
> これはたんに氏が僕の青春にとつてきはめて大切な人であつたためではなく、氏の評論の性格からもきてゐます。（傍點、引用者）

といふ書出しで始まつてゐる。[12] 中村の青春的小林秀雄論の基底に「中村光夫の青春」がうづくまつてゐることがここから察せられようといふものである。

それでは中村が「僕の青春」と言ふ時、それはいつからいつまでの時期を指すのか。勿論、かういふことは當の中村にもはつきり答へられるわけのものではあるまい。彼は四十二歳の頃、次のやうに書いた。[13]

> 人生のなかでただ自分は青春についてだけ何かを知つてゐる筈だと信じてゐるうちに、いつか青春と云はれる年齢をすぎて見ると、かつて掌に握つてゐたやうに思へた青春とは何であつたか却つて疑はしく思はれます。
>
> 果して自分は若かつたことがあるか、あるひは今の自分が失つたに違ひない若さとは一體なんであつたかなどといふ愚問がときどき心をかすめます。

中村はここで、自分には青春と言へるほどのものはあつてなかつたに等しいと述べてゐるわけであり、小林がかつてランボオを愛讀してゐた時期を顧みてそれをきつぱり青春と言ひあらはしたこと、そして中村の小林論がそのやり方を踏襲してゐることが想起される。中村にとつての「僕の青春」の質、或は彼におけるその意味がこのことからも朧氣ながら解るやうに思ふ。

右の文では若さと青春が同義語として使はれてゐるが、中村が小林との關係で「僕の青春」といふ時、それはもつと狭い、限られた一時期を指してゐるのであらう。

何度か言及した『戰争まで』は私には何の皮肉もなく中村の青春の美しい記念碑に見えるが、昭和十三年から十四年までのフランス留學が彼の狭義の青春の一部をなしてゐたとは考へ難い。それにしても『戰争まで』は形式だけにもせよ小林秀雄宛ての私信である。青春讃歌としての側面を持つこの作品が小林を意識しながら書かれたことは、この二人の文學者の類縁を考へる際に私達の興味を惹く事實ではないだらうか。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

「小林氏は僕の青春にとつてきはめて大切な人であつた」と書いた中村が漠然と思ひ浮べてゐたのは高等學校から大學にかけての學生としての自分のことだつたのではないかと想像される。中村が小林の知遇を得たのは高等學校時代であつたといふが、彼は東京帝國大學入學後に外交官志望を棄てて文學部佛文學科に轉じた事の次第を昭和四十五年の「今はむかし」で次のやうに回想してゐる。[14]

高等學校の三年間に、かなり強く文學にひかれながら、大學は法學部を一年やつたのも、自分の文學的資質にたいする疑ひのほか、一生外國ぐらしをする資格が手に入れられるなら、三年ぐらゐはいやな勉強をしてもいいといふ幼稚な打算があつたやうです。

それが、實際、はひつて見ると、法學部の勉強は、そんな甘い考へで追ひつくものでないことがわかつたので、仕方なく文學部にうつる決心をしました。

この決心をうながした動機は、その年の秋滿洲事變がおこつたこと、フロオベルの書簡をよんだこと、前年から小林秀雄氏を知つたこと、などであつたと思ひますが、これらは、いづれも外的な偶然と云へないことはありません。

私達はここにフローベールと小林秀雄の名が記されてゐることに注目しなければならない。この二人の文學者が中村光夫の文學部への移籍のことで果した役割はともかくとして、彼等は青年期の中村の文學を支へ、彼の「青春」を正當化しただらうと思はれるからである。フローベールの書簡について言へば、中村は、「人生の目的をすべて見失つたやうな顔をした貧しい病身な學生」としての生活の中からそれを讀んで「復活の歓び」を感じたことを『フロオベルとモウパッサン』の「後記」の中で述べてゐる。[15] しかしその「歓び」から三十數年を隔てた中村がフローベールに對して當時とは異なる態度を執るやうになつたことは拙稿の第一章の中で手短かに書いた通りである。それではもう一人の小林はどうだつたのか。

中村はこれも三十數年後の「師と私」の中で、『本居宣長』執筆中の小林の姿を次のやうに描いてゐる。[16]

小林氏の頭はもう眞つ白になり、僕も遠からずさうなりさうです。お互に歳をとつたものと思ひますが、いつも前方を歩いて行く、及びがたい人といふ印象はかはりません。

青年期の中村はフローベールと小林ほどではないにしても二葉亭四迷にも親炙し、昭和十一年には二葉亭研究で池谷賞すら受賞してゐるが、その二葉亭が世を去つたのと同じ四十六歳になつた時、彼の墓詣りをして、

むかしは伯父さんぐらゐのつもりでゐた彼が、いつのまにか自分より若死にした人になつてしまつたといふ事實は、一面においては彼と別れるときがきたのを意味します。

と書き記した。[17] それは中村が二葉亭より長生きをしたために過ぎない、といふやうな悪い洒落は言はないことにしよう。かういふことが年齢の上下だけで決められる筈はない。私達としては中村光夫が人生

NII-Electronic Library Service

Meisei University

の途上で、青春の偶像たるフローベールとも二葉亭四迷とも別れたといふのに、小林秀雄とは遂に別れなかつたことの意味を思へば足りるのである。

中村にとつて小林が「及びがたい人」であるといふ、その「印象」の淵源をここで明らかにしなければならない。中村は小林との出會ひを様々に描いてゐるが、その中には次のやうな文がある。[18]

文體とか精神といふ言葉を意味もわからぬままに輕蔑して、いはば文學のない文學青年といつたいらだたしい觀念的生活を送つてゐた當時の僕は、同じ惡徳を、おそらく幾倍かの強さで生きながら、それを根にして立派な表現をつくり上げてゐる氏に驚異の念を抱くほかはなかつた、と云ふより氏の書くものが心にふれる唯一の文章であつたのです。

これこそ私には、中村光夫の熱烈な青春本位の小林秀雄論の裏に働く心理を説き明す文であるもののやうに思はれる。中村は彼のそれと「同じ惡徳を、おそらく幾倍かの強さで生き」抜いた同類を九歳年上の青年の中に發見して、その「惡徳」から脱け出す緒をつかんだのではなかつただらうか。

文體や精神といふ言葉へのいはれのない輕蔑は中村の青春らしくない青春の、ほんの一つの現れであつたらう。彼の「いらだたしい觀念的生活」の内實を私なりのやり方で再構成すればそれは次のやうになる。

文學を、ただそれだけを後生大事にかかへこみながら、そこから何一つ生み出せないこと。文學といふ觀念を手に入れたばかりに他の一切を見失つたこと。世俗を侮りながら、氣がついて見ると、その世俗から逆に侮られてゐること。

資料から離れて勝手な想像をしたと言はれさうだが、中村があちこちに書き散らしたものから判斷して、彼の「青春」はかういふものであつたとしか思へない。そしてこれは中村のことだけでなく、日本の鋭敏な文學青年を、といふよりは、知的にも精神的にも衆に擢んでてゐながら或る決定的な一點で缺けたところのある文學青年を待ち構へてゐる陷穽である。この種の青年がかつて輩出したこと、今日でも出現し得ることの中には近代日本文化の基本的性格が横はつてゐるやうに思はれる。

青年期の中村は小林がどろどろした、形をなさぬ青春を後にしたことを直覺したのであらう。それにくらべれば中村の「觀念的生活」は微温的なものでしかなかつた。そして中村は小林が彼自身の惡徳を逆用して、文學的表現の華を咲かせつつあることに驚異の眼を瞠つたのであつたらう。

かう見て來ると、小林の青春に對する中村の態度には、青春そのものを過大視するボヴァリスムの他に、小林を「及びがたし」として見上げるもう一つのボヴァリスムが作用してゐることが感じられる。このやうに二つのボヴァリスムがからみ合ふ形で中村は小林の青春を美化した、といふのが私の見立てである。

以上、ボヴァリスムといふ、讀者が聞き慣れないであらう言葉を強引に利用しながら中村光夫を論じて來たが、私はこの言葉を辭書的な意味のままで使はうとしてゐるのではない、と述べたことを想ひ起して頂きたい。もし中村が文學者の故郷は青春にありとか、小林秀雄は

NII-Electronic Library Service

Meisei University

すばらしいとか口走るだけの人間であれば、彼は嘲笑されて然るべきであるが、さういふ感覺から發して一箇の文學的生涯を實現させるのは並大抵のことではない。そして中村はそれをやつてのけ、小林とは違ふタイプの文學者になつたのである。

それにしても中村光夫を繼承するとはどういふことなのであらうか。それは彼のボヴァリスムのこはばりを解きほぐすことなのではあるまいか。私の見る所、中村の青春論はいささか空疎であり、また（本稿では取上げられなかつたが）彼の文明批評は幾分大仰である。私達はそれをもつと内面化することに努めなければならない。その後に残るものが尚ボヴァリスムの名で呼ばれることにふさはしいとしても、私達はそれを文學の宿命として甘受しなければならないであらう。

今、その課題が私達に負はされてゐる。

（この論文は明星大學特別研究助成費の援助を得て書いたものである。）

註

底本は次の二種類である。

中村光夫全集全十六卷（筑摩書房　昭和四十六年―四十八年）

小林秀雄集（筑摩書房・現代日本文學全集42　昭和三十一年）

左に全集①とあればそれは中村光夫全集第一卷のことである。

1　これについては4を參照のこと。

2　全集⑥　月報の中の「對談再録　創作批評」による。

3　全集①　解説六〇九ページ

4　全集⑨　五八七ページ。尚、この全集版ではボヴァリスムはボヴァリズムと表記され、それは「日記文學について」を収録した『時代の感觸』（文藝春秋　昭和四十五年）の中でも同じである。たしかに英語のbovarismの仮名表記はボヴァリズムであるが、これはもともとフランス語であり、しかも（たとへばフェミニズムのやうに）日本語として一般化してゐるのではないこと、まして中村が論じてゐるのはフランスの文學者であることなどの理由から、表記はボヴァリスムとした方がいいやうに思はれる。少なくとも私はボヴァリスムで通すことにする。また中村はこの言葉を他の箇所でも使用してゐるであらうが、そこまでは調査が及ばなかつた。

5　全集⑫　一〇ページ

6　全集⑦　五二七ページ

7　以下の引用文は『小林秀雄集』四二三―四二四ページに據る。

8　この見出しは中村光夫全集では省かれてゐる。

9　全集⑤　四二二ページ

10　『小林秀雄集』　二三〇ページ

11　同右　二二四ページ

12　同右　解説四一九ページ。尚、全集⑥一八四ページではこの引用文の中の「かうして一卷にまとめて」の部分が削除されてゐる。

13　全集⑧　一四二―一四三ページ

14　全集⑭　五ページ

15　全集②　四三三―四三四ページ

16　全集⑭　六〇一ページ

17　全集②　五ページ

18　全集⑥　二三五ページ

NII-Electronic Library Service